

## 「罪に対する神の怒り」

(ローマ1・18～32)

### 一、神の怒りが現れている

18節をご覧ください。へといふのは、不義によって真理を阻んでいる人々のあらゆる不敬虔と不義に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。とあります。パウロ先生は何を語ろうとされたのでしょうか。人間の不義、すなわち罪に対する神の怒りでしょうか。それもあります。ですがそれ以上に、キリストによって現された善き知らせについて語ろうとされました。

### 二、LGBTQと福音

きょう開いた箇所は、LGBTQについて考えさせられる聖書箇所でもあります。LGBTQは、レズビアン(女性同性愛者)、ゲイ(男性同性愛者)、バイセクシュアル(異性にも同性にも恋愛感情や性的関心を持つ人)、トランスジェンダー(出生時に割り当てられた性別と自分が意識する性が一致しない人)、Qはどれにも当てはまらない人です。人によって捉え方のちがいがありますが、いわゆる性的少数者のことです。神のことがから教えられるのは、キリストはLGBTQの方々のためにも死んでくださったことです。ですから

私たちは、避けて通ることができません。聖書のことばに立つなら、LGBTQの方も、私共も、同じ罪人です。キリストによって救われなければならぬ罪人です。LGBTQのほうに罪深いなどと考えるのは、福音に反している考え方です。ですが、LGBTQの方がどういふ方なのかを知らない、不必要な偏見を持ってしまふことも事実です。「腫れ物にはさわらない」ではなく、私たちと同じく、キリストの救いを必要としている方々と見るのが良いです。

もし教会にLGBTQの方がいらっしやったら、あるいは「実は、私はゲイなんです。トランスジェンダーなんです」と打ち明ける方がおられた場合に、偏見の目で見たら、その方は教会を去ってしまうことでありましょう。場合によっては、キリストからも見捨てられたと思ってしまうかもしれません。そうならないように、私たちの側では、学びが必要になると思います。また、聖書から考えることができるように、準備しておいたらよろしいかと思えます。「聖書から考える」とは、聖書を土台にして、キリストの福音に聞いて行くことです。それでも失敗はあると思いますが、そのような気持ちで事前に準備しているかないかで、ずいぶん異なってくると思います。

### 三、パウロが指摘したこと

神が造られた性は、人に関しては男と女です。《神は人を自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。》(創1・27)とあるからです。こう受け取るのは、LGBTQの方々を排除するという意味ではありません。聖書を土台にして人間の性について考えますと、こうなるということです。では、

ローマ書に書かれている罪の問題は、どのように捉えたらよいのでしょうか。26節後半より27節をご覧ください。《ローマ1・26～27》ここで語られている《自然な関係は何でしょうか。男と女が結ばれることでありましょう。では、今その誤りに対する当然の報いその身に受けています》は、今日何に適用されるのでしょうか。良く分かりません。いずれにしても、この箇所を今日のLGBTQに当てはめるのはまちがいです。と言いますのは、パウロが指摘しているのは、すなわち聖書が指摘しているのは、神を畏れず、己を神としたために、汚れに引き渡された結果だからです。ローマ人は、パウロから見ると異教徒でした。なのに、19節にあるように《神について知りうることは、彼らの間で明らかです。神が彼らに明らかにされたのです。》と語りました。どういふことなのでしょう。それは2章14節がヒントになります。《律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで

律法の命じることを行つ場合は、律法を持たなくても、彼ら自身が自分に対する律法なのです。》とあります。各人の心に刻まれている「やって良いこと、悪いこと」を無視しなければ、それで「救われている」とまでは言えませんが、神は寛容な心をもってご覧になっていると言えます。それを無視して「自分は何もできる。己に恐いものはない」と傲慢になり、己を神のように考えてしま

ますと、神はあることをされるということです。それが、24節です。《そこで神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡されました。そのため、彼らは互いに自分たちのからだを辱めていきます。》と。その結果が性的な乱れであると、パウロはここで語っています。すなわち、聖書は語っています。教会にLGBTQの方が来られたら、共に神に向き合い、主イエス・キリストの恵みと救いを見上げた方が良いです。そのためには、私共の学びも必要ですが、聖書を土台として考えていったら良いと思えます。ある場合は、障がいとして受け止めるのが適切なこともあるでしょうし、治療が必要な場合もあるでしょう。あるいは、そのまま受け入れるのが適切な場合もあるかもしれません。いずれにしても、私共が受けなければならぬいさばきは、神御自身である主イエス・キリストが十字架の上で受けてくださったと受け止めておくことが必要です。